今日のイラスト639「イラストでたどる石州街道⑳三浦之介元久の墓」古谷眞之助

実は、ここを描く時、撮り鉄に人気の SL 撮影ポイントである長門峡から津和野側に 300m 進んだ龍宮橋を取り入れて龍宮淵を描こうと思っていた。そして出来ることなら SL が通過するシーンも含めて描くつもりだった。しかし、取材時には SL は長期の整備に入ってしまってディーゼル車が引っ張っていたし、車を降りて河原まで歩き鉄橋と SL と淵とをうまく取り込めるシーンがないか探したのだが、これぞと納得できるシーンは見つからなかった。それで淵近くの断崖絶壁上にある三浦之介生墓を選んだのである。

イラストでたどる石州街道 ⑳ 三浦之介元久の生墓

長門峡駅から津和野側に少し進むと阿武川は深い淵を形成しており、山口線は龍宮橋を渡る。その下が龍宮淵で、かつては流れが激しく青い渦が巻いていて、その底は龍宮に通じていると信じられていた。この淵の断崖絶壁の上に直径３ｍの塚があり、その中央に石塔が立っている。山口の仁保庄の地頭、三浦之介元久の「生墓」と伝わるものである。

彼が鷹狩のためにこの地を訪れた時、鷹によって水の底深くまで導かれた。そこは龍宮であり、お姫様から不老の薬の入った玉手箱を渡された。一日過ごした後、元久は龍宮淵に戻ってきたが、実は百日が経過しており、死んだとばかり思った家族は墓を建てていた。これが「生墓」伝説となったのである。

文・イラスト＝古谷眞之助

世の中にはこれと似たような伝説は多く残っている。山口県にも、楊貴妃伝説（ 長門市・向津具半島 ）小野小町伝説（ 下関市・川棚 ）静御前伝説（ 山口市・徳佐 ）などたくさんあるが、この鉄橋の下に龍宮城へと繋がる深い淵があるという話は全く知らなかった。浦島太郎の龍宮城と異なるのは、片や海、片や清流の淵という点。浦島太郎は亀によって龍宮城へ導かれ、三浦之介は何と鷹が導いている。そして浦島太郎が龍宮城に滞在したのは３年、三浦之介は１日である。それぞれ地上では 300 年が、また 100 日が経過していた。そういう点では三浦之介の方はスケールが小さいともいえる。浦島太郎の玉手箱は、いわば人間の寿命を示しており、開けてはならぬと言う約束を違えて開けたものだから、煙が上がってお爺さんになってしまった。きっと 320 歳位のお爺さんなのだろう。三浦之介の玉手箱に入っていたのは「不老の薬」で、事実 100 日後に生還した三浦之介は、生還後 100 歳以上の長生きをしたと伝えられている。100 歳という点では、浦島太郎より、話はよりリアルと言えないだろうか。（ 2023.11.14 記 ）